紹介

渡辺澄夫・喜多芳之 編
大和国若槻庄史料　第一巻

興福寺大乗院領大和国若槻荘は、畿内均等名荘園の典型として、また散村形態から環濠聚落を形成した荘園として、夙に著名であり、現在の大和郡山市若槻町は、往時の面影をよく今日に伝えている。

編者の一人、渡辺氏は、当若槻荘を分析の中心に据えた論文「畿内型庄園の名構造に関する一試論」（史学研究四六号）・「大和平野における環濠聚落の形成と郷村制との関係」（同五〇号）を、昭和二六・八年に公表して右の事実を明らかにしたのを初め、爾来、畿内荘園の研究に、特に精力的に取組んで来られたし、その成果は、氏の著書『増訂畿内庄園の基礎構造上・下』（昭和四四・五年）に集成されている。そして今度、かかる厖大な史料集の刊行を企てられた訳で、氏のたゆまぬ学究に、まず敬意を表したい。また喜多氏は、当地旧庄屋の家に生まれ、農業を営み、地元大和郡山市市議会議長や奈良県市会議長会議長などを歴任されたが、その傍ら郷土史の研究を続けて来られた篤学の士である。

さて本書は、古代・中世篇（約三四〇頁）と近世篇（土地関係、約一七〇頁）とからなっている。近世篇には、喜多氏が自家の土蔵より発見し、整理・筆写を行なって来られた庄家時代の史料の中、土地関係史料、即ち文禄四年＝享保七年の若槻村検地帳が収録されている（他に、多門院日記・春日神社文書からの引用史料も収める）。この他、続いて刊行予定の第二巻には検地帳類の残りと水利関係史料を、第三巻には貢租・村方等と近代の地租改正関係史料を収める計画であるという。

古代・中世篇は、諸種の記録・文書を博捜し、若槻荘に関係する記載を網羅的に収集、編年的に配列している（但し、古代は文書一通のみ）。しかも史料選択の基準は、単に若槻荘の名辞に留まらず、史料掲載或は註の形で、大乗院の荘園支配、室町幕府や織豊政権の奈良支配、戦国期に於ける若槻荘下司番条氏等国衆の動向など、折に触れて記し、当荘をめぐる情勢の理解を促す。殊に私の如き初学の者にとっては、有難い限りである。以下、この篇に収められた若干の史料について述べてみたい。

明月記建仁三年三月七日条（二号）にみえる「若槻庄」は、これ迄、当荘園と同一か否か確定できなかったが、大乗院寺社雑事記長禄二年十一月廿五日条（本書八〇頁）の記事を勘合することによって、同一の荘園である事実は、ほぼ間違いないところとなった。従って、明月記前掲条は大和国若槻荘に関する初見史料ということになる（本書巻末解説五二一頁）。徳治二年の若槻荘土帳（七号）は、最初に挙げた渡辺氏の論文に於て、詳細な分析が加えられた文書であり、その記載内容から、徳治二年及びそれ以前の荘園内部構造を知ることができる。若槻荘、ひいては均等名荘園研究の際の、最も基本的な史料の一つといえよう。今回、広く一般の利用に供せられたのは、実に悦ばしい。康正二年正月御兵士引付

（一九号）も興味深い。ところで本篇の大半（頁数にして七割弱）は、刊本『大乗院寺社雑事記』からの引用によって占められている。同書は全一二冊に及ぶ大部なものであるが、その中九冊目までについては、日本史研究会史料研究部会の編になる索引が作られ、既に巷間に流布している。だがそのことは、本書の価値を少しも貶めはしない。本書が広い視野に立って史料を集め、かつ『索引』が教える以上に精緻を尽しているからである。

これまで述べ来ったことは、この優れた史料集の内容のごく一部でしかない。本書がその巻末に、所収史料及び若槻荘についての簡明にして要領を得た解説を載せ、併せて今後の問題点を提示しているのも、所収史料理解の良き手助けとなろう。そのうえ別刷として、徳治二年の条里坪付図（仮称）、嘉元四年横田荘土帳、若槻町小字図並びに付近航空写真、大和郡山市付近の条里と荘園地図が添えられており、何れの印刷も鮮明である。編者の周到な配慮に感嘆するばかりである。本書及び続巻の充分な活用は、均等名荘園や、荘園制下の村落から近世村落への転換をめぐる問題解明に、必ずや多くの寄与を為すに違いない。

最後に若し許されるなら、望蜀の言を二・三述べさせて戴きたい。厖大な大乗院寺社雑事記からの史料採集が、行き届いた配慮の下に、しかも厳密に行なわれている事実は前述したが、反面、『大乗院寺社雑事記索引』に挙げられているにも拘らず、本書に収録されない箇所が、時として見当らぬではない。他に、未だ『索引』が学界に提供されていない部分ではあるが、明応八年十二月十三日条も採って欲しかったものの一つである。尤もこれらの記載は、或は何らかの理由によって故意に割愛されたのかも知れないが、然るべき理由を見出し得なかったので、気が付いたままに記させて戴いた。身未熟なるが故の独断に基づき、不当な非難を加える結果になりはしないかと恐れている。次に渡辺氏の著書では、荘内三二坪の石王丸田地面積が、徳治二年の土帳と坪付図とでは異なる様に述べているが（前掲著、上六七－八頁）、この史料集で見る限り、共に三反半で異同はない（本書二二頁及び付録）。如何なる訳であろうか。その他、誤植・脱漏かと思われる箇所も、まま見うけられる。例えば、四六頁九行目「反米八升五合」は「反米八斗五合」であろうし、九〇頁最後の行「若槻庄正願院負所米」・九一頁「継舞」は、それが拠るところの刊本『大乗院寺社雑事記』では、「若槻庄正願院殿負所米」・「縁舞」となっているのである。

以上、勝手な言辞を連ねたが、それらは何れも些細な事柄に属し、本書の優れた史料集としての価値を、多少とも損うものではないと考える。末尾ながら、本事業遂行の順調かつ速かならんことをお祈りして、この拙い紹介を終りたい。

（A5版五三四頁　昭和四八年三月刊　吉川弘文館発行　定価五、〇〇〇円）

（杉橋隆夫・京都大学大学院学生）